

## 親子で体を動かしてふれあい遊びにチャレンジ ～自分たちであそびもつくってみよう～

- 1 趣 旨：親子で楽しみながら体を動かして遊ぶことをテーマとしたプログラムを実施し、幼児期に必要なとされる多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培う。
- 2 日 時：平成29年1月21日（土）13：30 ～ 22日（日）11：30
- 3 場 所：国立淡路青少年交流の家
- 4 対 象：子どもとその保護者 15組50名程度
- 5 参加者：20家族64名
- 6 ゲスト：NPO法人生涯学習サポート兵庫

遊びクリエイター 堀 良尚 氏  
NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路  
理事長 木田 薫 氏



### 7 プログラムの内容：

#### 1日目

#### 13：50「親子de遊ぼう①」～体を動かしておもいっきり遊ぼう～

講師にNPO法人生涯学習サポート兵庫遊びクリエイターの堀良尚氏をお招きし、親子遊びを行った。家族で手遊びをしたり、歌に合わせて体を動かしたり、踊ったりと様々な親子遊びを披露していただいた。親子遊びを通して、身体だけではなく、心もほぐれていく参加者の様子が伺えた。



#### 15：10「親子de遊ぼう②」～家族対抗運動遊びリンピック～

家族対抗で運動遊びに特化した遊びリンピックを行った。どの競技も親子で行う競技だったこともあり、自然と親子で協力し合う場面が見られた。



#### 16：20「子育て交流会ワークショップ&子ども運動遊びリンピック」

保護者と子どもに分かれて活動を行った。保護者は夜の子育て交流会に向け、子育てについて他の保護者と議論してもらい、課題や悩みを挙げてもらった。

子どもたちは班で協力して課題を解決する遊びリンピックをおこなった。年齢が上の子どもがお兄ちゃん、お姉ちゃん役となり、子ども同士で相談し、課題に挑戦していた。



## 19:30「絵本の読み語り&子育て交流会」

夜はNPO法人ソーシャルデザインセンター淡路理事長の木田薫氏をお招きして、プログラムを行った。絵本の読み語りでは、小さい子どもから大人まで楽しめる絵本を読んでもらった。参加者は目を輝かせながら、絵本に見入っていた。

読み語り後、保護者と子どもに分かれて活動を行った。

保護者は午後に行ったワークショップをもとに交流会を行った。木田氏から、子育てについての助言や気持ちの持ち方のお話があり、保護者の皆さんは自分自身の子育てを思い浮かべながら真剣に聞いていた。

子どもたちは、読み語りの続きを行い、大型の絵本や紙芝居を楽しんだ。



## 2日目

### 9:00「みんなde遊ぼう」～段ボールを使って遊んでみよう～

身近な素材である段ボールを使った遊びを体験した。中に入って転がったり、迷路に挑戦したり、積んだり、というシンプルな遊びであったが、子どもたちの自由な発想で新しい遊びに発展していった。



### 10:00「みんなde創ろう」～新しいあそびづくりにチャレンジ～

保護者と子どもと分かれて遊びづくりを行った。保護者は班ごとにそれぞれ遊びを考えてもらい、どの遊びが子どもに一番楽しんでもらえるか競い合った。子どもたちのために本気で遊びづくりに励んでいた姿が印象的だった。

子どもたちは段ボールを使って自由遊びを行った。子どもはまさに「遊びのプロ」。自由に遊ぶだけで、様々な遊びが生まれた。

最後は保護者が創った遊びを子どもたちに体験してもらった。どれも子どもたちからは好評で、創った保護者も体験する子どもも、誰もが笑顔で楽しんでいた。



## 8 参加者の声

- ・2日間テーマが統一されていて、興味深く、楽しかった。
- ・段ボールという身近な素材で遊べる事を発見できた。
- ・子育て交流会が良かった。また、関わり方を教えてほしい。
- ・親子同士のつっこんだコミュニケーションがとれて、楽しかった。
- ・子どもの笑顔がたくさん見られて良かった。
- ・幼児向けだと躊躇していたが小学生も楽しめた。
- ・お母さんが創ってくれた遊びが一番楽しかった。

## 9 所感

- ・運動遊びをテーマとした事業であったが、なかなか普段は親子で一緒に体を動かす機会がなかったという参加者も多く、親子が楽しくふれあう機会を提供することができた。
- ・ゲストの堀良尚氏、木田薫氏のお話しをもとに家族間や保護者間の交流を持つことができ、子どもに対する思いを再確認していただけただけでなく、話し合うことで家族同士のコミュニティを作ることができた。
- ・2日目の「みんなde創ろう」では、「大人の本気」を見ることができ、「子どもたちのため」という熱い思いを感じることができた。また、子どもたちも大人がつくった遊びを笑顔で楽しんでいた。アンケートの「親が創ってくれた遊びが楽しかった。」との声からもわかるように、「親の手づくり」が子どもにとってどれだけうれしいことなのかということを参加者、そしてスタッフも改めて確認することができた。